

氏 名	シルビア タルタリーニ Silvia TARTARINI
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 158 号
学位授与の日付	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	A Study of the Evolution of Writing in China and Japan —From Oracle Bones to the Digital Age— (中国と日本における文字使用の変化について—甲骨文字からデジタル時代 まで—)

(主 査)
論文調査委員 教授 阿辻哲次 助教授 赤松紀彦 教授 ヨリッセン, エンゲルベルト

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は現代日本語における文字使用の実態と具体的な表記システムについての研究であり、日本語の表記において近年現れつつある種々の現象を指摘し、その背景に存在するメカニズムを解明することを目的とする。

本論文は2部4章から構成され、第1部は漢字の表記方法と他言語への適用に関する問題を取り扱う。うちの第1章はこれまでの漢字表記の歴史とその機能面の研究にあてられ、この部分は漢字表記の背景とメカニズムを明確にすることを目的とする。第2章では日本への漢字の伝来と、日本語の読み書きの問題を取りあげる。

第2部では中国と日本における文字表記に関する現代的な問題が取りあげられ、うちの第3章ではアメリカの言語学者 Mark Hansell の研究をふまえて中国語のアルファベット表記を分析し、第4章では最近の日本語表記に見える書字方向や「珍字・奇字」などの新現象を分析する。この分析によって、漢字による言語表記によこたわるアクティブなメカニズムが理解される。

現代日本語を表記するシステムを一般に「漢字仮名交じり文」と呼ぶが、しかし漢字仮名交じりといっても実際には漢字と二種類の仮名のみではなく、それ以外にラテン文字や時にはギリシャ文字など、他系統の文字が日本語表記に際して日常的に使用される。

日本語を表記するのにこのような他系統の文字、あるいは種々の記号、さらには絵文字に類するものが近年ますます多く使われるようになってきた。それは現在の日本語表記システムに関する大きな特徴である。

このように多様な文字を使って書かれた文章は、これまで辞典など言語の規範を示すと考えられた書物には掲載されず、単に規範から外れた書き方にすぎないと見なされてきた。しかし新聞や雑誌などで頻繁に使われるようになるにつれて、辞典などにもしだいに収録されるようになり、今ではむしろ日本語の書き方における一種の進化したタイプとも考えられるようになった。

それではこのような進化は、なぜ起こり得たのだろうか。筆者はこの進化の要因が漢字の本質にあると考える。漢字を発明した中国では、殷代から現代にいたるまで漢字が言語表記の手段として一貫して使われ続け、その過程で多音化や多義化などさまざまな現象を生み出してきた。形声文字の意符や音符の増加に伴って漢字の数が増え、それによってその時まで表記できなかった多数の概念や物的対象が表記可能になった。この漢字の進化が、漢字文化圏の展開とともに中国周辺の諸国家にもそのまま伝来されていくこととなった。

日本では漢字を中国から導入して以来、漢字だけで日本語を記録できるようにさまざまな工夫がこらされてきた。ただ漢字だけで日本語を完全に書くには種々の問題があったため、漢字から作られた二種類の仮名で漢字による表記を補完してきた。すなわち仮名の創造は、文字に対する日本人の姿勢が柔軟であったことに起因する。その柔軟さによって日本人は現在に至るまで漢字と仮名の短所を克服し、文字の長所を活用しながら新しい状況に対応してきた。さらに他系統の文字を積極的に混用し、漢字と仮名の本質・長所をたくみに利用してきた。

この点で日本語は他系統の文字をある程度まで漢字化或いは仮名化して使ってきたといえる。いうまでもなくこのような文字の使用形態は日本独自の現象であり、それはほかでもなく文字文化に対する日本人の豊かな創造力を実証するものである。

日本語表記体系はたえず革新を好み、独創的であるという特徴を持つ、まことに興味深いシステムである。本論文では日本語の表記システムに大きな影響を与えた漢字について、その構造原理から説きおこし、中国や日本で漢字はどのように言語表記のために改良がなされてきたか、具体的な問題を取りあげながら、日本人の観点から見ればごく普通の書き方であるものの、実はきわめてユニークと思われる日本語表記システムの本質について分析を加えた。このような観点に立った漢字表記論は従来に例を見ず、そこに本論文の独創性を見ることができる。

論文審査の結果の要旨

本論文は現代日本語における文字使用の現実と、表記システムの具体的な様相について研究したもので、日本語表記における近年の特徴的な現象を分析し、表記の背景に存在するメカニズムが漢字に本来的に備わる特質から発生することの解明を目的とする。

日本語を表記するシステムを一般に漢字仮名交じり文と呼ぶが、しかし「漢字仮名交じり」とは言っても、実際には漢字と二種類の仮名のみでなく、場合によってはラテン文字やギリシャ文字まで必要になる。このように他系統の文字を数種類、あるいは種々の記号や絵文字に類するものまで使って日本語が書かれる傾向が、近年になって非常に顕著になってきた。

この多種類かつ多様な文字で書かれた日本語の文章は、これまで辞典など言語の規範を明示する書物においては等閑に付され、単に規範から外れた書き方にすぎないものと見なされてきたが、現実の社会で新聞や雑誌などでこの種の文章が頻繁に使われるようになるにつれて、辞典などにもしだいに収録されるようになってきた。それは今ではむしろ、日本語の書き方における一種の進化したタイプとも考えられるようになり、現在の日本語表記システムに関する大きな特徴を形づくる要素となっている。

それではこのような変化は、いったいなぜ起こり得たのだろうか。

もともと表意文字と表音文字を混在させながら数種類の文字を同時に使う言語は、世界的に見てもきわめて特殊なものであるが、この多種の文字の中心にあるのはやはり漢字であって、漢字がもつ特質がこれまでの日本語文章表記システムの骨格を形成してきた、と筆者は考える。

日本では中国から漢字を導入して以来、長い時間と幾多のプロセスを経て、日本語を漢字で記録できるようになるまで数多くの工夫がこらされてきた。だが漢字だけで日本語を完全に書くには種々の問題があったため、漢字から作られた二種類の仮名を創造し、それで漢字による表記を補完してきた。

言語表記の補助的な文字として仮名が誕生したこと自体、日本人が文字に対して柔軟な姿勢を保持していたことを物語る。そしてその柔軟さによって、日本人は現在に至るまで漢字と仮名の短所を克服し、文字の長所を活用しながら新しい状況と必要性に対応することに成功してきた。さらに多種多様な系統の文字を積極的に混用し、他系統の文字の欠点や不適合のところを補うために、漢字と仮名の本質や長所をたくみに利用してきた。現在の日本語では普通に使われる「W杯」とか「T定規」「βカロチン」などの表記は、そのような漢字と仮名の使い方の延長線上に位置するものにほかならない。

日本語は他系統の文字をある程度まで漢字化或いは仮名化して使ってきた。言うまでもなくこのような文字の使用形態は日本独自の現象であり、それはほかでもなく文字文化に対する日本人の豊かな創造力を実証するものである。その証明として、たとえば携帯電話の機種を示す「H」（エッジ）という表現がラテン文字をあたかも仮名として使った例であることや、車のボディや商店の看板などで横書きに書かれる際の書字方向が統一されていないことなど、これまであまり考察の対象とされてこなかった日常的な表記の実例を、筆者は多数の図版をあげて指摘する。

表音文字だけを使う言語環境に生まれ育った筆者が日本語を見る時には日本人がほとんど気づかない着想があり、本論文には上述の諸例のような現象の分析がユニークな議論として展開される。言語を表記するという行為は日常生活の一部であるが、しかしほとんどの日本人は、日本語の表記システムがきわめてユニークなものであるという事実気づいていない。そしてまた言語学者のレベルにおいても、このテーマは日本をはじめ諸外国の言語学者の注意をこれまでほとんど引かなか

った。その点で本論文はこれからの文字研究に関する新しい方向を開くものであり、研究者にも大いに啓発を与えるものであると評価できる。

また、本学位申請論文は、言語をとりまく文化的環境の理想的なあり方に関する研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。